

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

—— 過ちを悔いずにワザハヒ（災）を終息させる呪術 ——

（3）

小林 信彦

前号で展開された論議の粗筋

“パーイシャジャグル”（bhaiṣajyaguru）と呼ばれるブッダが仏教で知られている。このパーイシャジャグルも、他のブッダと同じように、人々をブッダならせようと決心している。そして、この目的を達成するために、病気や身体障害、悪政や飢饉、間違った考えなど、人々がブッダになる準備をする上で障害となるものを取り除いてやろうと心に決めている。

ところが、多岐にわたるパーイシャジャグルの活動の中で、中国人の関心は病気や身体障害に集中した。みんなをブッダにするというパーイシャジャグルの決心には興味を示さず、延命機能が期待されたのである。こうして、究極の医師として「薬師」が中国人に受け入れられることになった。そして、中国で作られた「薬師」の彫像の中には、「薬器」を手にするものがあった。

ある時期から日本ではヤクシの彫像は必ず薬壺を手にするようになる。究極の医師として頼られたという限りでは、日本のヤクシは中国の「薬師」の機能を継承している。ただし、中国の「薬師」と違って、日本のヤクシは人間に反省を求めることがないし、人間の悔悟のほどを慎重に見極めることもない。

仏教文献が伝わる遙か前から、日本には医療を専門とするカミがいた。オホナムチ（大己貴）とスクナヒコナ（少彦名）がそれである。日本に帰化したヤクシは、この二柱の医療のカミと同一視されるようになった。そして、ヤクシはさらに多くのカミガミと同一視されたのである。

同じ状況の中で同じ目的を達成するために、日本ではオホ・ハラヘ（大祓）がケクウ（悔過）と並行して行われていた。ケクウで誰も反省することがないのは、ハラヘ（祓）の伝統に反映されるツミ（罪）観を忠実に受け継いだ

桃山学院大学人間科学 No. 34

までのことである。オホ・ハラヘがツミ以外のものを扱うようになって、ツミ・ユルシ（大赦）に力を入れるようになったことから窺えるように、ツミの消去に対する強いこだわりは消えなかった。どんな手続きを踏もうと、ツミが消えさえすれば、カミ（神）が喜ばないはずはない。

カミが喜ばばワザハヒ（災）やヤマヒ（病）は終息が期待される。ツミが消えた状況を用意することは、ヤマヒやワザハヒを終息させるのに決定的に効果があると信じられていた。この意味で、ケクウはハラヘの伝統を継承している。ケクウはハラヘと同じように人間がカミに働きかけるパフォーマンスである。日本のケクウには即効性があるが、ハラヘの際にカミの反応は速い。

中国の「薬師」も日本のヤクシも、究極の医師として人々に頼りにされた。この限りでは、仏教のブツダではないし、まして人々をブツダにするつもりなどない。このように、基本機能の点で日本のヤクシは中国から「薬師」の伝承を受け継いでいて、同じように仏教のパーイシャジヤグルと全く異次元の存在である。しかしながら、重要な点で日本のヤクシは中国の「薬師」と異なっている。日本のヤクシは人間に反省を求めないし、人間の悔悟のほどを慎重に見極めることもないのである。

Ⅰ.1 ノリトに追加されたヤマヒやワザハヒは『薬師經』に対応が見られる

古代の日本では、神社と寺院の間に明確な役割分担があった。オホ・ハラヘは神社が執行し、ケクウは寺院が執行したのである。そうすると、共に国家の危機に対処していた神社と寺院の間にどういう関係があったのであろうか。この点については興味深い事実がある。神社で用いられるノリトの一部が増補される際に、寺院で唱えられる仏教文献から語が採られているのである。

オホ・ハラヘのノリトには、古いハラヘの伝統を継承して、ツミを列挙する箇所があるが、古いハラヘの時代にはなかったヤマヒやワザハヒが追加される。ハラヘがオホ・ハラエに発展して扱う対象が増えると、ツミのリストが大幅に増補されて、ヤマヒやワザハヒなど、ツミでないものの例も含むことになった。従来のノリトになかった項目を加えるのであるから、リストの改定者は新たに入れるヤマヒやワザハヒの名称をノリト以外の所から探し出さなければならなかった。別の材料を使うといっても、どれでもよいわけではなく、

日本で開発されたヤクシ・ケク（薬師悔過）

神代から伝わるノリトに準じる権威がある文献でなければ、効力を期待することはできなかった。

長い準備期間を経て『延喜式』の編纂が完了したのは10世紀の初頭であるが、そこに収められているノリトはもっと古い伝承を伝える。この文献にはオホ・ハラへの際に唱えられるノリトのテキストが記録されている。『延喜式』が伝えるノリトに見られるツミのリストには、ハラへがオホ・ハラへに発展したのを反映して、それまでのリストにはなかった項目が追加されている。ヤマヒヤワザハヒの名称である。

ここで注目すべきことは、ノリトに追加された項目が『薬師經』に対応が認められることである。『延喜式』が伝えるノリトに挙げられる21項目¹⁷⁹⁾を見ると、ヤマヒヤワザハヒの名称を挙げる6項目のうち、5項目までが『薬師經』にも見られるのである。¹⁸⁰⁾ヤクシ・ケクを通じて絶大な超自然力が信じられていた『薬師經』に、この『延喜式』でノリトのテキストに追加されたのと符合する病気や災害の名前が見られる。

『延喜式』	『薬師如來本願經』（達摩笈多）
① シラヒト 白人	白癩（皮膚が白くなるレブラ）
② コクミ 胡久美	背偃（腫瘍性クル病）
③ ハフムシ 昆虫	毒蛇・悪蝮・蜈蚣・蚰蜒（ヘビ・サソリ・ムカデ・ゲジゲジ）
④ ツ 高鳥	怪鳥
⑤ シデ 畜仆 蠱物鳥	殺畜生・取其血肉

『延喜式』が伝えるリストに見える二つの語、①“シラヒト”と②“コクミ”が指すのはヤマヒであり、それぞれ「皮膚が白くなるレブラ」と「腫瘍性クル病」を指す。¹⁸¹⁾そして、これにそれぞれ対応する項目が『薬師經』にも見られる。すなわち、“白癩”と“背偃”がそれである。この二つの語が指す意味も、それぞれ「皮膚が白くなる癩病」と「腫瘍性クル病」であり、ノリトの対応項目と一致する。¹⁸²⁾『延喜式』でも『薬師經』でも、順番は違うものの、この二つの項目は隣り合わせに並んでいる。¹⁸³⁾

さて、オホムナチは動物が引き起こす危害を非常に気にしていて、国家の

桃山学院大学人間科学 No. 34

基礎を作るために目指した目標の一つとして、鳥と獣と地上を這う小動物のワザハヒをハラフ（拂ふ）ことを目的とするノリ（法）を制定しているほどである。古代の日本人にとって、このようなワザハヒが大きな関心事であったということであろう。

とりけものはむし わざはひ はら まじないや のり
鳥獣昆虫の災異を攘はむが爲に、其の禁厭むる法を定む。¹⁸⁴⁾

ノリトで追加された項目のうち、①“シラヒト”と②“コクミ”に続いて現れるのは、③“タカツ・トリ”と④“ハフ・ムシ”であり、“ケモノ”は欠けてはいるものの、“トリ”と“ハフ・ムシ”を含むオホムナチが定めたノリを思わせ、この二つの項目で挙げられているのはワザハヒをもたらず動物である。

日本語の名詞“〔ハフ・ムシ〕”は、「地を這う小動物」の総称である。本居宣長が言うように、地を這う小動物が引き起こすワザハヒは、古代の日本人にとって大きな関心事であった。¹⁸⁵⁾『延喜式』の③に見える語「ハフ・ムシ」はワザハヒを指す。一方で、『薬師經』に見られる四種類の動物、すなわちへびとサソリとムカデとゲジゲジは、すべて日本語の“ハフ・ムシ”が表示範囲内にあるものであり、オホムナチのノリ（法）で排除すべきハフムシに一致する。

このノリトで次に挙げられる④“〔タカツ・トリ〕”が指すのも、オホムナチのノリで排除の対象とされるワザハヒ（トリ・ケモノ・ハフムシ）の一つである。『薬師經』には「地を這う小動物の恐怖」に続いて、悪夢の恐怖が語られるが、その例の一つとして夢に怪しげな鳥が現れる場合が挙げられる。¹⁸⁶⁾

『延喜式』のノリトで“ハフ・ムシ”の語と“タカツ・トリ”の語は併置されているが、『薬師經』でそれに対応する“毒蛇・悪蝎・蜈蚣・蚰蜒”と“怪鳥”も、順序は逆であるが隣り合わせの文章に見える。¹⁸⁷⁾ただし、『薬師經』では“怪鳥”が出て来る文章に続く文章では、火と水と毒と刀で襲われる場合に続いて、野獣と地を這う小動物に襲われる場合に言及される。

日本人にとって血はケガレであり、「動物を殺して血と肉を取り、他人に危害を与える呪術を行うこと」（⑤ 畜仆し・蠱物爲る）はツミである。したがって、日本古来の慣習にはなかったが、地方によってはこれを行うことがあっ

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

たらしく、一度ならず政府は禁令を公布している。¹⁸⁸⁾『薬師經』でも、動物を殺して血と肉を取る呪術は、人に危害を加える恐ろしい行為の例として挙げられている。¹⁸⁹⁾このこともブツダになる準備には障害となる。ここでも、『延喜式』で追加されたノリトの項目と『薬師經』のテキストとの間に一致が認められる。

さて、804年に成立した『皇太神宮儀式帳』には、伊勢神宮で行われていた祭式の細部について詳しく記されている。『延喜式』に至る細則の整備作業を進める際に、この文献は重要資料として活用され、ここに記録された多くの事項が規則となった。冒頭部分にツミのリストが挿入されているが、末尾部分を除いては『延喜式』にあるのとほとんど同じである。

この文献に伝えられるノリトに初めて加えられた項目のうちで、¹⁹⁰⁾⑥“川入り〔ノ罪〕”と⑦“火烧キノ罪”は『薬師經』にも対応が見られる。¹⁹¹⁾そして、『皇太神宮儀式帳』でも『薬師經』でも、この二つの項目はそれぞれ語意がぴったり一致する上に、順序は違うものの、それぞれのテキストで隣り合わせに並んでいる。¹⁹²⁾

『皇太神宮儀式帳』 『薬師如來本願經』（達摩笈多）

- | | |
|-----------|------|
| ⑥ 川入り〔ノ罪〕 | 爲水所溺 |
| ⑦ 火烧キノ罪 | 爲火所焼 |

なお『薬師經』の中で、⑥と⑦の二つ（“爲水所溺”と“爲火所焼”）は、前に挙げた①・⑤の場合と全く違う文脈に表れ、「まだ死ななくてもよいのに、不慮の事故で死ぬ場合」（不時死）の二例である。寿命がまだ尽きていないのなら、「薬師」は死を避けさせることができるのである。¹⁹³⁾

仏教では「不注意の結果として起こった偶然の出来事」に過ぎない溺死と焼死は、日本ではケガレを発生させる忌まわしい出来事であった。すでに大化改新のミコトノリ（詔）に、溺死のケガレについて示唆されていて、¹⁹⁴⁾10世紀の記録には井戸で溺れ死んだ者が拡散する汚染についてが伝えられている。¹⁹⁵⁾そして火もまたケガレの発生源であり、879年に淳和院で失火があった際に、天皇の住む宮殿に火の粉が飛んだ。¹⁹⁶⁾この火事に汚染された人がサイモン（齋

桃山学院大学人間科学 No. 34

院)に入ったので、予定されていた賀茂祭が中止されたという。¹⁹⁷⁾ 火事の現場にいただけでもケガレに汚染され、それが他の場所にも拡散するのである。¹⁹⁸⁾ それほどまでに火事が忌み嫌われていたとすれば、もともと死は汚らしいことと思われていたのであるから、火事に遭った焼死体は、日本で特に忌み嫌われていたことになる。

オホ・ハラへの時代になってノリトに新たに加えられた7項目のうちで、6項目が対を成し、それぞれに対応する二つの語句が『薬師經』でも隣接して現れる。文献で確認できるこの事実は、オホ・ハラへのノリトと『薬師經』の間に見られる対応が偶然でないことを強く示唆するものであろう。

ノリトのテキストが増補される際に、異文化圏で作られた文献から採られた語句が使われた。『薬師經』のテキストにある言葉は、タカマガハラゆかりのカミガミも効果がある呪文として、“ハフリ”と呼ばれる神職から評価されていたのである。異文化圏に起源があるテキストや彫像が使われるにもかかわらず、そして新しく開発された儀式であるにもかかわらず、『薬師經』の朗読を伴うヤクシ・ケクが古代の日本で重んじられたのは当然である。

ノリトを唱えてオホ・ハラへを執行するハフリと『薬師經』を唱えてヤクシ・ケクを執行する僧侶との間には、非常にはっきりした分業が成り立っていた。ところが、僧侶が朗読していた『薬師經』から語句が抜き取られて、ハフリが朗読するノリトの一部になっていたのである。僧侶たちから借りた『薬師經』にハフリたちが目を通して見つけ出したにせよ、ハフリたちの抱えている問題を知っていた僧侶たちが、『薬師經』の中に使えそうな語句を見つけ、それを教えてやったにせよ、この二つのグループの間にあった協力関係が示唆される。何しろ両グループは同じ目的のために協力して、それぞれの儀式を行っていたのである。

I.2 日本人の想像を絶する理由で『薬師經』は病気や災害に言及する

仏教の原則に立てば、「行いと報いの対応法則」によってすべては自動的に進行し、ブツダといえどもこれに干渉することはできない。「悪い行い」(悪

日本で開発されたヤクシ・ケク(薬師悔過)

業)に対応する期間だけ、それに相応しい「辛い報い」(苦果)に堪えるしかない。「行いと報いの対応法則」によって自動的に決まった「辛い報い」を中断することは、ブッダの機能が及ぶところではない。仏教で構想されたブッダの仕事は、単に日常生活の不都合を取り除くだけのために奇跡を起こすことではない。

玄奘譯の『薬師經』にも“應に彼の如來本願功德を念じて此經を讀誦し、其の義を思惟し、演説し、開示すべし。樂求する所に隨ひて、一切皆遂げむ”と言われる。¹⁹⁹⁾このような言及にしても、主眼はブッダの教えが正しいことを強調することにあり、人々を説得してブッダを目指して頑張る気にならせることにある。もっとも、長尾佳代子が指摘するように、大乘化が進むと次第にブッダの超能力への言及が見られるようになり、²⁰⁰⁾“ブッダの名前を唱えさえすれば目的が達せられる”と言わんばかりの発言が目立つようになるものの、²⁰¹⁾ブッダになって「心の移転」を断ち切るという究極目的は、言うまでもなく何ら変わることがなかった。

中国で「薬師」と呼ばれるパーイシャジャグル(bhaiṣajyaguru)は、すべての者をブッダにすることを究極の目標とする。²⁰²⁾いつかみんなをブッダにならせるために、パーイシャジャグルは人々が現に抱えている問題の面倒を見てやって、心置きなくブッダになる準備に専念させようとする。そこで、パーイシャジャグルが主役として登場する經典『パーイシャジャグル・スートラ』(bhaiṣajyaguru-sūtra)では、ブッダを目指して頑張ろうとする人々の抱えている問題が列挙されている。²⁰³⁾これを見て日本のノリト改訂者たちは、新たに追加すべきヤマヒとワザハヒとして採り入れたのである。

仏教世界では、ほぼ無限に近い時間をかけて努力を続けなければブッダになれない。何しろ準備期間として設定されているのは、一つの宇宙が発生してから消滅までに要する時間(kalpa)、その52乗のさらに3倍の時間である。²⁰⁴⁾人間がブッダになろうと決意してから、これだけの時間をかけて頑張り続けなければならないのである。ブッダになる者の例は途方もなく稀であり、シャーキャ部族国家(sākya/釈迦)の世襲議長後継予定者がなつて以来、こ

桃山学院大学人間科学 No. 34

の2500年の間に成功したのは一人もいない。それどころか、数億年や数十億年の近未来に次のブツが現れるというような近視眼的な見通しは、久しく守られてきた仏教の伝承で設定されていない。

ところが日本では、少しも頑張らなくとも、誰でも今の人生が終われば直ちにブツになる。しかも人間だけではない。動物どころか、自分で動けない草や木もブツになり、²⁰⁵⁾生まれることも死ぬこともない石や岩もブツになる。このように、日本のブツが仏教のブツとは別次元のものである以上、ブツダ = 佛 = ブツ ²⁰⁶⁾ という等式は成り立たない。この等式を前提にして論議を展開すると、²⁰⁷⁾現実を無視した幻想に陥る危険が避けられず、インド文化圏との日本文化圏が仏教によって結び付いているということにもなりかねない。²⁰⁸⁾

身体の死を越えて、インドの心(vijñāna)は永遠に機能し続ける。これは特定の場面に限られる異常現象ではなく、すべての動物に起こるありふれた自然現象であり、当人の意志とは無関係に起こる。心が次の身体に移る過程で記憶は失われ、誰も前世のことを覚えていない。次の身体は自分で選ぶことができず、それまでに通過した数限りない生涯での「行い」によって、自動的に決まるのである。

仏教では「心の移転」はごくありふれた事象であるので、日常の経験と矛盾があってはならない。正気の人には誰も前世のことなど覚えていないので、「記憶は次の身体に持ち越されない」というのが仏教の立場である。胚の段階から胎児の段階まで、身体が子宮にいる間は記憶が失われませんが、出産時に記憶の喪失が起こる。ひどく狭い膣を通過する際の苦痛があまりにも大きいので、それに耐えかねて記憶を失うのである。²⁰⁹⁾

遂げられなかった志を果たそうとしたり、晴らせなかった憾みを晴らそうとして生まれ変わる日本人はいるが、²¹⁰⁾これは仏教の前提となる「心の移転」とは似ても似つかぬものである。日本でテンシャウ(轉生)が起こるのは、異常に執念の強い人間に限られる異常事象であり、すべての動物に起こるありふれた自然現象ではない。

それに、志を果たしたり憾みを晴らしたりするには、次に何に生まれるか

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

を自分の意志で決めなければならず、テンシャウした後も生前のことを完全に覚えていなければならない。日本人の考えるテンシャウは、今の生涯の延長に過ぎないのであって、仏教で構想された「心の移転」と相容れない。さらに、志を果たしたり憾みを晴らしたりするには、生まれ変わりは一回かせいぜい数回で十分であり、永遠にテンシャウを繰り返すことはない。楠木正成と正季の「七生報國」²¹¹⁾が想像の限界であろう。心の移転 = テンシャウという等式は成り立たない。

いつまでも心が機能し続けるということは、いつまでも苦しみが続くということと考えられ、インドで興ったすべての宗教にとって、「心に移転」を断ち切ることが究極目標である。正統宗教のシヴァ教やヴィシュヌ教では、最高神に自己を同一化することによって目標を達しようとする。神の存在を認めない異端の仏教では、心そのものを消滅させることによって「心の移転」を断ち切ろうとする。そして、これに成功した場合に“ブッダ”と呼ばれるのである。

みんながブッダを目指せるような状況を整備してやろうというパーイシャジャグルの志は、日本人にとって理解すべくもないことであった。日本人は死の直後にジャウブツ（成佛）するのであるから、「心の移転」など心に浮かべる余地さえなかった。「心の移転」が信じられていない日本では、永遠に続く苦しみから解放される必要などなく、誰もブッダになろうなどとしなかった。日本では死ぬとみんなブツになるが、ブッダになろうとした者は一人もいなかったのである。

ノリトの改訂に当たった古代の日本人にとって、『薬師經』の中に病気や災害の名前が列挙されている理由など、知ったことではなかった。そうでなくとも、無条件で無制限のワザハヒ回避を究極の目標とする日本人にとって、ブッダになることを究極の目標とする仏教の主旨は、想像を絶するものであった。

仏教のパーイシャジャグルが目指しているのは、奇跡を起こして人間の法外な望みを頼まれるままに叶えてやることではない。「行いと報いの対応法則」

桃山学院大学人間科学 No. 34

に干渉して、定められた死期に近い人間を快癒させたりしないし、定められた死期に死んだ者を生き返らせたりしない。『パーイシャジャグル・スートラ』に登場するブッダは究極の医師ではないのである。仏教のパーイシャジャグルが目指しているのはただ一つ、いつかすべての者をブッダにすることである。この目標を達成するために、ブッダになる準備をする上で不利な条件があれば、それを取り除いてやろうとする。

そこで、パーイシャジャグルが取り除こうとする不利な条件に言及して、『パーイシャジャグル・スートラ』には多くの病気や身体障害が挙げられ、いろんな災害に言及されている。人々が病気や障害で苦しんでいたのでは、ブッダになる準備をする上で深刻な支障となる。みんなをブッダにしてやろうと心に決めたパーイシャジャグルにとっては、まず何とかしてこの問題を解決しなければならぬ。

こうして、ブッダのパーイシャジャグルが解決すべき問題として、仏教文献『パーイシャジャグル・スートラ』/『薬師経』には病気と身体障害の名前が列挙され、災害の名前が列挙されている。そして、そのうちのいくつかがノリトが増補される際に採られているのである。しかしながら、この作業を通じて日本人が『薬師経』から何かの影響を受けたわけではない。『薬師経』の真意を全く理解しないまま、ノリトの増補者は律義に作業を行ったのである。

日本人が好んで儀式で唱えた異文化文献の中に、ノリトの増補のために探していた語句がたまたま見つかったに過ぎないのである。仏教世界で作られた『パーイシャジャグル・スートラ』/『薬師経』は、何かの意味を伝える文献としてではなく、超自然力が内在する呪文の集まりとして、日本人の間で重宝された。そして、日本には数多くの中国語訳仏教文献が伝わったが、同じ運命をたどるのが常であった。

J.1 中国人と違って日本人は仏教に戸惑うことがない

インド文化と異なる文化伝統を受け継ぐ中国人にとって、仏教を体系として理解することはたやすくなかった。特に民衆レベルでは仏教の核心部分は

日本で開発されたヤクシ・ケク（薬師悔過）

何も分かっていなかったであろう。しかしながら、少なくとも中国の知識人は好奇心をもって異文化としての仏教に接し、何とか理解しようとした。少なくとも大いに驚き、そして当惑した。

人死して精神滅せず、随ひて復形を受く。生きる時に行う所の善惡、皆報應あり。故に、貴ぶ所は、善を行い道を修め、以て精神を練りて已まず。以て無爲に至り、佛たるを得るなり。²¹²⁾…… 然れども、玄微深遠に歸し、得て測りがたし。故に、王公大人、死生報應の際を觀ては、瞿然として自失せざる莫し。²¹³⁾

「心が永遠に移転し続けて、いつか必ず自分のしたことの報いを受ける」という構想は、想像を絶する奇異なアイデアとして、古くから教養ある人々の間で話題になり、好奇心と驚きの対象となっていた。仏教はあまりにも中国文化と異質な世界観であり、そのままの形で受け入れることは無理であった。

一切の性空に徹する空觀の理解の如きは少数の専門家的学匠によってとげられ、一般的には精神は不滅で、その精神が現在の生涯になした善惡業によって次の善惡の生へ再生輪廻して行くことを教えることこそ、仏教の大抵の教旨であるとされたのであり、かかる教義こそ兩晉南北朝の人々を動かし、多数の人々を仏教信奉に誘引した所以であった。²¹⁴⁾

異質な文化複合に接した中国人にとって、この「永遠に続く心の移転」は、理解できるものではなかったにしても、インド文化の他の局面とくらべれば、まだましであったらしく、この点に焦点を当てて中国人に仏教を勧めたようである。しかしながら、他の局面に較べればまだましであった「永遠に続く心の移転」でさえ、中国に定着するには、「薬師」に延命機能を認めたり、「懺悔」を構想したりして、仏教の原則から乖離するのは避けられなかった。

日本が中国と決定的に異なるのは、仏教文献に接して違和感を感じる者が一人もいなかったことである。仏教の世界観に当惑を示す文章は、日本人が書いた文章のどこにも見当たらない。異質なもの不可解なものを納得できないものとして、仏教文献を読んだ者がいないのである。最澄や空海を始め、日

桃山学院大学人間科学 No. 34

本で仏教を指導したつもりの人々は、自らの文化との間に越え難い断絶があることを十分に気づくことなく、タマの存在を片時も忘れず、いつもカミの機嫌を気にしつつ、軽く仏教文献を読み流したのである。日本人は異質な文化の恐ろしさに鈍感であり、理解し難い文化に接しているという自覚が希薄であった。異質と気づけば、何とか納得しようと無理をする。そして、それでも納得できなければ、納得できるように読み替えることになる。

中国人は「悪い行為をすると、いつか必ず辛い報いが起こる」という仏教の命題を変換して、「悪い行いを後で消去することができれば、辛い報いは起こらない」という独自の命題を立てた。そして、悪い行いを消去してもらうために、「佛」の彫像の前で「罪」を悔いた。この人々は仏教を継承しているつもりでいたから、起きるべき災害を予防するためには、自分たちの都合がよいように変換してでも、「行いと報いの対応法則」を何かの形で導入せざるをえなかったのである。

ところが、日本人は仏教の原理を改竄する必要さえ感じなかった。日本はインド文化圏から余りにも遠く、人間の行き来がなかったし、日本人は中国人のように仏教に好奇心をかき立てられることがなかった。肯定的にであれ否定的にであれ、仏教の「行いと報いの対応法則」を本気で取り上げることはなかったのである。「行い」とその「報い」について、日本人は仏教の立場を受け入れることも拒むこともなく、ただただ無関心であった。

J.2 カミの機嫌を気する日本人は、異文化の仏教に反応しない

ヤクシ・ケウの際にも、仏教の儀式を行っているつもりでいながら、仏教の普遍法則にただただ無関心であり、これに抵抗して独自の命題を立てた中国人の立場を気にすることもなかった。日本人が気にしたのは強い意志と激しい感情を備えたカミであった。ツミやケガレがあると、激怒したカミは悲惨な状況をもたらして人間を困らせ、逆の場合は好ましい状況をもたらして人間を喜ばせる。

機嫌が良いと、カミガミは人間に有利な状況をもたらす。708年に武蔵にア

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

カガネ（銅）が発見された。「テンニイマス・カミ（天座神）とチニイマス・カミ（地座神）の顕し奉れるズイホウ（瑞寶）」であった。政府は直ちに改元して、年号を“和銅”（ニキ・アカガネ）とした。²¹⁵「祥瑞」の底にある中国の政治理念はさておき、アカガネが発見された時の日本人は、カミが跋扈する文化圏にふさわしく、機嫌のよいカミがもたらす幸せに感動している。²¹⁶

アラヒト・ガミ（現人神）といえども、日本ではカミに振り回されるのである。“徒に憂勞を積みて、政治闕くるが如し。神の咎を胎せること、實に朕が躬に由れり”と伝えられるように、²¹⁷聖武はあれこれ思い煩うことが多くなり、マツリゴトにも失敗があるようだが、これはカミのトガメ（咎）が身に降りかかったからである。何かカミの機嫌を損ねるようなことをしたらしい。天皇にトガメを与える主体を指す漢字は、“天”でなく“神”が用いられているが、この字がここで指すのは日本のカミである。

日本のブツダウ（佛道）で人々が崇めた他の礼拝対象と同じように、ヤクシは日本で独自の発展を遂げたカミである。日本人に頼りにされ、薬壺を手にして病気の治療を主要な職務としながらも、次第にその職域を広げて行き、人間に降りかかるどんな災難をも解消できる万能の救済者に成長したのである。限りない超自然力を備えて無制限に救済を行い、片っ端から人々の期待に応える日本のヤクシは、仏教のブツダから果てしなく遠い存在であり、日本人にははなはだ都合のよいカミである。

「人間が何かの行いをすると、それにふさわしい報いが必ずある」という仏教の命題は、「心の移転」という原則の上に立てられている。実際に「報い」が現れるのは、1000兆年後かも知れないし、さらにそれより遙か後かも知れないのである。しかしながら、「心の移転」に馴染めない中国人は、災害が避けられないと言われれば、今の人生で起きるか心配に駆られる。そこで、中国人が考え出したのが「懺悔による罪の帳消し」である。過ちを悔いることによって、過ちそのものを消し去ろうというのである。そうすれば、過ちに連動して起こる災いも回避できることになる。

災害を消去することが図られるという点では、中国の「薬師齋」は日本の

桃山学院大学人間科学 No. 34

ヤクシ・ケクにプロセスが似ているように見えるかも知れない。しかしながら、プロセスが作動する原理を全く異にする。中国人が行った「悔過」では、原因となるべき罪を消去することによって、その結果として生じるはずの災害を消去しようとしている。仏教の法則を改竄した結果、仏教と決定的な乖離が生じたにせよ、中国人は少なくとも改竄する努力をしている。「心の移転」を前提とする「行いと報いの対応法則」が仏教体系の必然前提になっていることを知っていて、都合のよいように変換することはあっても、これを無視することはなかったのである。

ところが、日本ではまるで状況が違っていた。多くの者が仏教文献を読んだことになってはいても、日本人とは違った風にものを考える人々がいることに思いを馳せることさえなかった。熱心にページをめくっていたとしても、肝心の所が分かっていなければ、読まなかったのと同じである。仏教文献が読まれたと言われる日本で、“小乗のものであるので、戒律は破棄すべきである”とか“草や木もブツになる”とか“女はブツになれない”とか言われる。そのような記述が仏教文献にないのは言うまでもなく、中国人も言っていない。ところが日本では、そういう反仏教的命題がむしろ仏教の核心を成すと信じられていた。仏教文献を研究したと言われる大学者たちは、細かい所はいろいろ知ってはいても、仏教を体系としてとらえることができなかったのである。

もっとも、『薬師経』の内容が分からなかったからこそ、日本人は無心にヤクシ・ケクをやれたのである。『薬師経』の主旨が理解できたら、ヤクシ・ケクなどとてもやる気にはならなかったであろう。ヤクシ・ケクが熱心に行われたことは、日本に仏教が伝わった証左ではありえず、逆に伝わらなかったことを裏付けるものである。日本人にとってワザハヒが消えるのは喜怒哀楽の激しいカミ次第である。気に入らないことや気に入ることがあると、その反応ははなはだ迅速で猛烈であり、カミがその気になれば、すでに起きているワザハヒも消えるのである。ワザハヒがすでに起こった際に日本人が打とうとした手は、もっぱらカミの怒りを鎮めることであった。

日本で開発されたヤクシ・ケクワ(薬師悔過)

K.1 日本人はキチジャウテンを使って繁栄を願う

642年に「大臣」の蘇我が指示してケクワを行って以来、日本政府が強い関心を示したのは、緊急の事態に対処することであり、すでに起こっているワザハヒを終息させることであった。8世紀になって中国との交流が盛んになっても、中国の習慣を取り入れて「懺悔」によって前もってワザハヒを防ごうという発想は起こらなかった。日本に帰化したヤクシは、反省を求めることのないカミになって、直ちに願いに反応するようになった。こうして、日本人はワザハヒに対処するのにヤクシ・ケクワという方法を採用し、日本流のやり方で独自の解決を図ったのである。

767年に行われたキチジャウテン・ケクワ(吉祥天悔過¹⁸⁾)は、ヤクシ・ケクワ以上に異文化と無関係に構想されたものである。「薬師」などと違って、中国語文献で「吉祥天」は「佛」でもなければ「菩薩」でもない。礼拝の対象ではないのである。“佛、菩薩の形像の前に在りて”という『梵網經』の言葉は当てはまらず、²¹⁹⁾中国には「吉祥天齋」が存在する余地がない。²²⁰⁾ところが、日本に帰化したキチジャウテン(吉祥天)は、直ちに人々の願いに応じるカミであった。

神護景雲元年春正月己未、勅す。畿内七道の諸國、一七日の間、それぞれ國分金光明寺に於て、吉祥天悔過の法を行へ。此の功德に因りて、天下太平に、風雨時に順ひ、五穀成熟し、兆民快樂にして、十萬の有情、同じく此の福に霑^{うるほ}はむ。²²¹⁾

律令制度の完成を目指す8世紀の日本政府にとって、「鎮護國家」を実現する上で根拠を与える文献は義浄訳『金光明最勝王經』であった。そして、キチジャウテン・ケクワの挙行も国分寺の建設も、文献根拠となったのは外ならぬこの經典であった。しかしながら、インド文献『スヴァルナーバーソッタマ・スートラ』(suvarṇābhāsottama-sūtra/金光明最勝王經)には、「王權の守護」を統一テーマとして追求しようとする姿勢がない。

『スヴァルナーバーソッタマ・スートラ』は決まった主題を追求する統一的な文献ではなく、互いに関連のない19の小作品から成る文集である。第6番目

桃山学院大学人間科学 No. 34

の小作品には、「〔四方を守る〕四人の大王」(caturmahārāja/四天王)が登場する。この「四人の大王」はそれぞれ強力な軍隊を持っていて、最も得意な分野は軍事援助である。そして、第8番目の小作品に登場するのがラクシュミー(lakṣmī/吉祥天)²²²⁾である。そして、この幸運の女神が提供するものとして、まず生活必需品の外に財宝が挙げられ、²²³⁾これに穀物と野菜が追加される。²²⁴⁾

「菩薩」ですらない「吉祥天」を帰依の対象とすることなど中国ではありえなかったが、日本人にとってキチジャウテンは少なくとも祈願の対象であった。そして、キチジャウテン・ケクウがブッキョウ儀礼として成り立ちえる根拠は、日本人によれば「鎮護國家を統一主題とする『金光明經』」にあった。この発想のきっかけは中国にあったらしい。²²⁵⁾5世紀の前半に『金光明經』を訳した曇無讖は、すでに「四天王」の軍事援助を取り上げて、“この經典のお陰で、人々の安全が保障され、暮らしも豊かになる”という主旨の言葉を反復している。²²⁶⁾

キチジャウテン・ケクウの効果に言及して、“天下太平に、風雨時に順ひ、五穀成熟し、兆民快樂にして、十萬の有情、同じく此の福に霑^{あび}はむ”と『續日本紀』で言うのは、ラクシュミーが登場する小作品(義浄訳第16大吉祥天女品/第17大吉祥天女増長財物品)に基づいている。日本でキチジャウテン・ケクウの典拠となったのは、『金光明最勝王經』に収められた小作品に過ぎないというよりも、その中で大規模な物資援助の一項目に言及する短い表現(“風雨時に順ひ、五穀成熟し”)に過ぎない。しかも、この表現は『金光明最勝王經』に独自のものではなく、似たような記述は『薬師經』などにも見られる。²²⁷⁾

こうして、日本に伝わった『金光明經』は、ごく一部にしか現れないシテンワウ(四天王)を根拠に、「鎮護國家」の文献根拠となったが、同じようにごく一部にしか現れないキチジャウテンも、「鎮護國家」に貢献する超越存在となった。²²⁸⁾キチジャウテンが人間に与える物の中には穀物と野菜もあるというだけの理由で、中国では礼拝対象でも祈願対象でもなかったものを取り上げて、『金光明經』の片言隻句をわずかな手掛かりに、日本人はキチジャウテ

日本で開発されたヤクシ・ケクワ（薬師悔過）

ン・ケクワを考案したのである。²²⁹⁾

このようにキチジャウテン・ケクワが行われるようになり、ケクワの可能性が拡大して未来のワザハヒを予防するようになっても、相変わらず日本人は異文化文献を体系として理解しようとせず、たまたま異文化の文献に見かけた語句を抜き出して、その時の都合に合わせて利用しているに過ぎない。²³⁰⁾ 8世紀の日本で評判が良かったキチジャウテン・ケクワは、あらゆる意味で異文化と無関係である。仏教の文化にも中国の宗教習慣にも、キチジャウテン・ケクワを連想させるものは痕跡すら見いだせないのである。キチジャウテン・ケクワの背後にあるのは、いつとも知れない遠い昔から日本に伝わる五穀豊饒を願う儀式であろう。

ヤクシ・ケクワを開発してワザハヒの即時終息を図った日本人は、次にキチジャウテン・ケクワを開発してシアハセを確保しようとした。同じように反省を要求しないカミが関与し、日本独自の文化伝承を受け継ぐものである。このキチジャウテンという新顔のカミは、人々の生活の根幹を成す食料の供給を請け合った。こうしてキチジャウテン・ケクワは、ヤクシ・ケクワと並んで奈良時代の日本で代表的な行事となった。

K.2 『大般若経』の朗読とヤクシ・ケクワの組み合わせでワザハヒに対処する

キチジャウテン・ケクワは「諸國」で行われただけでなく、宮中でも行われるようになり、『金光明経』の「講説」とセットになっていた。984年に成立した『三寶繪詞』に見られるように、昼は『金光明経』が「講説」され、夜はキチジャウテン・ケクワが催されたのである。²³¹⁾ こうして、経典の朗読と結び付いて、キチジャウテン・ケクワはワザハヒを扱うのである。

このように特殊なケクワが行われるようになったのと連動して、代表的なケクワであるヤクシ・ケクワに変化が起こった。マラヒトノ・ヤクシ（賓客の薬師）として、延命を主な任務としていたヤクシは、9世紀後半になると、モノノケ（物恠）やヒノケ（日異）²³²⁾を鎮める役目も担うようになった。正体不明のタマが人に害を与えると信じられ、“モノノケ”や“ヒノケ”と呼ばれて

桃山学院大学人間科学 No. 34

大いに恐れられるようになっていたのである。

〔承和十年五月〕丙申。又、内裏の物もの恠け、并に日ひ異のを鎮むる爲、百法師をあびびて、三箇日を限り、薬師經を清涼殿に於て讀ましめ、薬師の法を常寧殿に於て修せしめ、『大般若經』を大極殿に於て轉ぜせしむ。諸司、醋食し、殺生を禁ず。²³³⁾

8世紀のヤクシ・ケクワは、カミが引き起こしたワザハヒを終息させるために行われたが、この点についてはその後に興味深い変化が見られる。9世紀になると、カミ以外のものが引き起こすワザハヒに対処するためにも、ヤクシ・ケクワが行われるようになったのである。そして、そのような場合には、必ず『般若經』が朗読された。このことに言及する「勅」が何回か出ている。²³⁴⁾この新しい呪術は、『般若經』に呪力を認める日本独自の発想と結びついていた。絶大な超自然力が潜む『般若經』の朗読会と対になって、カミが関与しないワザハヒを停止するヤクシ・ケクワは、未来の災害を予防する機能も帯びるようになったのである。

ヤクシ・ケクワを行って宥める対象は、超現実世界に属するカミであったのが、現実世界を徘徊するふとどきなタマということになった。“モノノケ”と呼ばれた正体不明のタマは、カミの意を受けてワザハヒを起こしているのではなく、自分自身の意志で人間に危害を加えている。モノノケはカミの代理ではない。人間に危害を加える存在として、正体不明のタマが日本社会に登場することになった。

何しろ今までと違った分野に進出するわけであるから、ヤクシ・ケクワはそれだけで未来のワザハヒを予防できるわけではなく、『大般若經』の朗読とセットになって初めて予防に効果があると考えられていた。²³⁵⁾モノノケが起こすワザハヒを押さえるには、ヤクシ・ケクワだけでは充分でなく、同じ日に必ず『大般若經』²³⁶⁾を唱えなければならなかった。この構想を日本人が思いついたのは、この經典に強力な超自然力が宿るという思い込みがあったからである。

『大般若經』に力が内在するという発想は中国にあり、²³⁷⁾“經典の言葉が伝える真理が「鬼神」を動かす”と言われる。ところが、日本のモノノケは真理に

日本で開発されたヤクシ・ケク(薬師悔過)

動かされることがないので、内在する超自然力によって制御するしかない。この力を利用して、仏教に馴染みがない日本人は、ワザハヒを引き起こす正体不明のモノノケの動きを阻止しようとしたのである。²³⁸⁾

病気というワザハヒを終息させるために、ヤクシ・ケクが桓武が危篤に陥った805年に行われた。²³⁹⁾この時のヤクシ・ケクは、『大般若經』の朗読とセットになっていない。ヤマヒを終息させるためなら、9世紀になってもヤクシ・ケクだけで充分と考えられていたのである。なお、ヤマヒを扱うヤクシ・ケクはこれが最後で、その後は行われることがなかった。

あとがき

古代の日本文化圏では、ヤマヒやワザハヒを終息させるために、ヤクシ像の前で『薬師經』が唱えられた。この際に使われるヤクシ像は、中国の「薬師齋」で用いられる「薬師像」と役割を異にし、遙か昔から日本に根付いていたカミのカタシロの伝承を忠実に継いでいる。同じように、日本で唱えられる『薬師經』は、中国で唱えられる「懺文」と機能が異なり、神代から伝わるノリトの伝承を受けている。

人間と「佛」の間に神秘的な交流を認める中国人の構想は、日本人の間に片鱗さえ見出すことができない。自分のしたことを人間が佛像の前で反省することは、日本人の心をよぎることさえなかった。神代から伝わるハラへのプロセスから知られるように、日本ではツミを贖う対価の中に反省が含まれていないのである。日本人にとって、ツミは付着した塵のように払うべきものである。ハラへは「犯した罪を解除してやる行事」であり、ハラへ・ツ・モノ(祓・物)²⁴⁰⁾を差し出して損害補填を済ましさえすれば、反省などしなくても、犯したツミはなかったことになる。

“ケク”のいう異文化風の名称にもかかわらず、この儀式の中に認められる日本人の意識は、遠い過去から先祖たちが慣れ親しんできたものであった。中国の場合と違って、祈願する側の反省は求められなかったし、祈願する人間と祈願されるカミの間に神秘的交流もなかった。このように、ややこしい

桃山学院大学人間科学 No. 34

手続きは不要であって、ワザハヒの決着は極めて迅速につくことが期待された。日本人が対処しようとしたのは緊急の問題であり、現に目の前で起きているワザハヒであった。

8世紀の日本では、天皇が重態に陥った時にヤクシ・ケクワが行われた。漢字を使って日本の宗教行事を指すのに使ったからといって、日本人が中国人と同じことをしていたことにはならない。日本の文化は中国の文化と異なる体系を成す。漢字を使っている、表す意味は同じではない。ヤクシ・ケクワは日本独自の文化事象であり、その成立に連動してハラヘがオホ・ハラヘに発展した。この時代の日本人は、ハラヘの変貌に対処するために、ノリトに挙げられるツミのリストを増補する必要に迫られた。その際に加えられたのは、ツミとは別のカテゴリーに属するヤマヒヤワザハヒの名称であった。

ノリトの増補者が追加すべき語を探し出したのは、ヤクシ・ケクワでノリト代わりに唱えられた『薬師経』からであり、ヤクシ・ケクワとハラヘの間にあった深い関係が示唆される。日本人にとって『薬師経』は異文化の文献であったが、文献の主旨を理解しないまま、ただ日本社会の変化に対処するために、必要な言葉だけをそこから探し出したのである。

同じように反省を要求しないカミを使って、奈良時代の日本人は新しい呪術を開発した。キチジャウテンもヤクシと同じように日本の文化伝統の中に取り込まれて、シアハセの基となる食料を人々にもたらしたのである。8世紀の日本人にとってキチジャウテン・ケクワは、ヤクシ・ケクワと並ぶ重要な呪術となった。この時代の日本人がキチジャウテン・ケクワについて語る際に、『金剛明光経』という仏教文献に言及するが、日本のキチジャウテン・ケクワと実際にかかわるのはその片言隻句に過ぎない。

平安時代になると、正体の分からないモノノケや正体の分かっている死者のタマに対処するために、ヤクシ・ケクワが行われた。現実世界を徘徊するモノノケや現実世界にかけては存在した死者のタマは、いつどこに現れて何をしでかすか分かったものではない。ワザハヒを恐れる政府は何をしでかすか分からないタマを抑さえて、未来のワザハヒを予防することにも力を入れる

日本で開発されたヤクシ・ケク（薬師悔過）

ようになった。

こうして、政府のワザハヒ対処策は扱う範囲が未来に及ぶことにもなって、異常現象の起こる日を予知することが課題になり、²⁴¹⁾古くから伝わるヒジリ（聖）の技術が注目されることになった。²⁴²⁾この時代に登場した空海に日本政府が先ず期待したのも、822年の太政官符²⁴³⁾からも窺えるように、タントラ仏教（tantrism）を日本に広めることではなく、²⁴⁴⁾ワザハヒの予防に貢献することであった。²⁴⁵⁾

人々がひどく脅えていたのは、ワザハヒの背後に潜むタマであった。正体不明のタマはモノノケとして個人に病気や精神障害をもたらすに過ぎないが、桁違いに規模の大きいワザハヒをもたらすタマがいて、疫病や戦乱や火災そして雷や虫害を引き起こす。こうなると、『大般若經』の朗読で補強したケクウくらいでは、とうてい手に負えるものではない。この問題を政府は深刻に取り上げて対策を考えた。

このような場合に登場するのは正体不明のタマではなく、世に広く知られた人のタマである。恨みを抱いて死んだ有力者のタマが憾みを晴らすために、社会全体に対して報復をするのである。激しい怨念に燃える強力なタマは、桁外れの大規模なワザハヒを引き起こす。そこいらを徘徊するモノノケをやっつけるようにはいかないのである。これに対処するには、何か新手を考えなければならない。

復讐にはやる大物のタマは“ゴリャウ”（御霊）“ミ・タマ”と敬称で呼ばれ、モノノケのように攻撃の対象ではなく、宥めすかすべき相手であった。863年5月20日に、特に激しく恨む5人のタマを選んで一堂に集めて、政府の主催でゴリャウ・エ（御霊會）を行っている。²⁴⁶⁾これがケクウが効かない相手に政府が考えた新手であり、カミに祭り上げて激怒するタマを鎮めようとするものである。

異文化圏の文献に接する機会があっても、日本人は体系としての異文化に見向きもしなかった。異文化圏から語を借用しながらも、それを使って日本人が饒舌に語っているのは、いつとも知れぬ古い時代から継承してきた日本

桃山学院大学人間科学 No. 34

の文化であった。このことを見事に例証するのがヤクシ・ケクワであり、仏教の儀式を行っているつもりでいながら、日本人は仏教の立場にただただ無関心であって、仏教を是認し切れない中国人の立場にも関心がなく、ひたすらワザハヒが起こるのをひたすら恐れ、シアハセがもたらされるのをいわずに望んでいた。

(おわり)

略号

『大正』: 『大正新脩大藏經』, 1924.1932。

『國大』: 『國史大系』(新訂増補), 1942。

『古大』: 『日本古典文学大系』, 1952.1967。

中国文献も日本文献も、中国語のテキストは日本語の読み下し文で示した。

注

179) 『延喜式』8, 『國大』26, 169。

180) loc. cit.: 國つ罪とは、……… 昆虫の災、高つ神の災、高つ鳥の災、畜仆し蟲物爲る罪。許許太久の罪出でむ。

181) 小林, 『オホ - ハラへと「薬師經」の関係 ヤクシ - ケクワの成立に連動して起こったハラへの変貌』, 『桃山学院大学総合研究所 研究叢書』23, 和泉, 2006, 22.23。

182) ibid., 25.29.

183) 『延喜式』8, 169: 國津罪止八 …… 白人胡久美 ……

達摩笈多, 『薬師如來本願經』, 『大正』14, 401: 第六大願 …… 背偃白癩

184) 『日本書紀』1, [前編] 47。

185) 本居宣長, 『大祓詞後釋』上, 『本居宣長全集』5, 東京, 1981, 124: さて、此蟲の災のことは、書紀神代'巻に、昆虫の災異を禁厭といふ事見え、大殿'詞にも、はふ蟲の禍なくと見え、十種の神賣の中に、蛇'此禮峰'比禮などのあるも、それを拂はむ料也。上代には、民のすみか、野山にまじりて、かりそめなるけまへなりしかば、蟲の害多かりしなるべし、又大殿祭の祝詞にしも、擧られたるを思へば、上代には、たゞなべて此害の多かりしにも有べし、今の世とても、蠅蜈蚣蜂などにさゝられて、なやむ事無きにはあらず。

186) 達摩笈多, 『薬師如來本願功德經』403: 或は復、人有りて、忽ちに悪夢を得て、或は諸の悪相を見、或は怪鳥來り集り、其の住所に於て百怪出現す。此の人、若し能く種種の衆具を以て彼の世尊薬師琉璃光如來に供養し恭敬せば、一切の悪夢の悪

日本で開発されたヤクシ・ケク(薬師悔過)

- 相と不吉祥事, 皆悉く隠没す。
- 187) *ibid.*, 403, 中1.4行, 4.6行。
- 188) 『續日本紀』40, 556:(791年)伊勢, 尾張, 近江, 美濃, 若狭, 越前, 紀伊等の百姓に, 牛を殺し用て漢神を祭るを斷ず。
『類從國史』10, 『國大』5, [前編]90:(801年)越前國に 加を行ひ をし牛を屠り神を祭ることを禁ず。
- 189) 達摩笈多, *op. cit.*, 402: 諸の畜生を殺して其の血肉を取り, …… 彼(の人)の命を斷じ, 及び其の身を壞むと欲す。
- 190) 『皇太神宮儀式帳』, 『神道大系』, 神宮 1, 1979, 10。
- 191) 達摩笈多, *op. cit.*, 404。
- 192) 『皇太神宮儀式帳』10: 國都罪止所始志罪波 …… 川入〔罪〕火燒罪乎 …… 達摩笈多, 『藥師如來本願經』404: 第四橫者 爲火所燒 第五橫者 爲水所溺
- 193) 小林, 『オホ・ハラへと「藥師經」の関係』, 52-58。
- 194) 646年3月22日に發布されたミコトノリ(詔)には反社会的なハラヘが禁じられ(『日本書紀』25, [前編]235-237), その事例がいくつか挙げられているが, そのような場合の一例として, 溺れ死んだ人間の死体を発見した者が言い掛かりをつけて, 溺れ死んだ者の間にハラヘを強いる場合が挙げられている(*ibid.*, 236)。溺死体は厭がられていたのである。
- 195) 井戸に落ちて死んだ者がいてケガレが生じ, それがもとで宮中にまで汚染が広がったという(『日本紀略』後編3, 『國大』11, 65)。その時代には, 流れる水には汚染保留機能が認められておらず(『文保記』, 『羣書類從』523, 雜部78. 『新校 羣書類從』22, 東京, 1932, 716), 流れない水に限って汚染を保留し, 汚染源となると考えられていたのである(*ibid.*, 716)。
- 196) 『日本三代實錄』25, 341:(貞觀十六年四月十九日丁未。)淳和院に失火す。飛燼, 轉行し, 禁中に飄落す。
- 197) *loc. cit.*:(貞觀十六年四月)廿一日己酉。賀茂祭。淳和院の火穢に染る人, 齋院に入る。仍りて, 祭事を停む。
- 198) もう一つ例を挙げると, 川合神社に火事があって, そこへ行っていた下社の氏人がケガレに汚染された。その後で下社に帰っていつものように活動していたところ, 下社もケガレを帯びることになった(『中右記』4, 『増補 資料大成』12, 東京, 1965, 213)。
- 199) 玄奘, 『藥師琉璃光如來本願功德經』, 『大正』14, 406。
- 200) 長尾佳代子, 「ギルギット本『藥師經』の成立 仏教大衆化の一齣」, 『パーリ学仏教文化学』6, 1994, 101-110。

桃山学院大学人間科学 No. 34

ギルギットで発見された『パーイシャジャグル・スートラ』と最古の中国語訳とを比較して、長尾はテキストの発展を考える。最古の中国語訳『灌頂]抜除過罪生死得度經』は、長尾の研究で明らかになったところでは、ギルギット本と基本構造が同じであるが、ブッダの名前への言及については、二つのバージョンの間に大きな違いが認められる。『抜除過罪生死得度經』で強調されているのは經典を聞くことである。經典に記されている「行いと報いの対応法則」を知ること重んじられて、不利な「行き先」(gati/趣)を避けるために「善い行い」が勧められる。これに対して、『パーイシャジャグル・スートラ』で重視されているのは、ブッダの名前を唱えることである。

201) 長尾の論文「ギルギット本『薬師經』の成立」(注200)によれば、『パーイシャジャグル・スートラ』にはかつては古い本があって、經典の理解が重んじられてブッダの名前を唱えることが重んじられなかった。その本が次第に変化して、ブッダの名前に宿る超自然力が強調する新しい本が出来た。それがギルギット本であり、ここではブッダの名前を唱えると「前世のことを思い出す能力」(jāti-smara)が備わるという。そうすると、何の努力をしなくとも、悪いことをすると嫌な目に遭わなければならないことが自然に分かる。

ブッダの名前に宿る力が強調されるのと呼応して、仏像の扱いにも大きな変化があった。古いバージョンを反映する『抜除過罪生死得度經』には、仏像礼拝に関する記述が1個所にしかない。これと対照に、新しいバージョンの『パーイシャジャグル・スートラ』に記述される儀式はすべて仏像を前提にしている。

ギルギット本『パーイシャジャグル・スートラ』は、經典またはブッダの教えを強調する『抜除過罪生死得度經』よりも、仏教の大衆化という点でより進んだ発展段階にあると言えよう。ブッダの教えを重んじる理知的立場からブッダへ理屈抜きに帰依することを薦める立場へ、パーイシャジャグル信仰が移ったことが示唆されるのである。

202) 小林信彦、「日本で開発されたヤクシ・ケクワ」(2),『桃山学院大学]人間科学』33, 2.6(C 1 仏教のパーイシャジャグルは医療を専門としない)。

前世のパーイシャジャグルは、「自分がブッダになった暁には、この世に生きているすべての者もブッダにしてやる」と「決心」した。この目的を実現するために、それぞれの者が被っている障害を除かなければならない。

203) *ibid.*, 5.6.

人々がブッダになる準備をするのに障害となるものとして、病気や身体障害、間違った考え、悪政や飢饉などであり、この一つ一つを片っ端から取り除こうとパーイシャジャグルは心に決めている。

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

204) ブッダになろうと決心してから実際にブッダになるまでの時間、すなわちブッダになるまでに要する時間は仏教の伝承でよく知られている。それによると、ブッダになるまでに経過する時間は3アサンキヤ・カルパ (asamkhyā kalpa) と言われる。

Abhidharmakośabhāṣya, ed. P. Pradhan, Patna, 1975, 181 (*kośa* 3. 93d.94

a³): tad asaṃkhyatryodvavam buddhatvam (ブッダであることは、3アサンキヤ〔・カルパにわたる準備〕の結果である)

ここに見える“カルパ”(kalpa)という語は、途方もなく長い時間単位を指している。一つ宇宙が発生して消滅するまでの時間が1カルパである。そして、“アサンキヤ”(asamkhyā)という語は超天文学的な数を指す数詞であり、その数値については、仏教の伝承でよく知られている。

ibid., 181-182 (*bhāṣya* ad loc.): ekānāṃ daśako dvitīyam | daśa daśakāni śatam trītiyam | daśa śatāni sahasram | daśa sahasrāṇi prabhedāḥ | daśa prabhedā lakṣam | daśa balākṣā mahābalākṣam | daśa mahābalākṣāṇy asaṃkhyam | (..... 一つの10〔10¹〕が二桁である。10の10、すなわち100〔10²〕が三桁である。10の100、すなわち1000〔10³〕〔が四桁である〕。10の1000、すなわち10000〔10⁴〕〔五桁である〕 10のバラークーシャ、すなわちマハーバラークーシャ〔10⁵⁰〕〔が五十一桁である〕。10のマハーバラクシャ、すなわちアサンキヤ〔10⁵¹〕〔が五十二桁である〕。)

そうすると、*kośa* 3. 93d.3. 94a³の意味は「ブッダであることは、 3×10^{51} カルパにわたる準備の結果である」ということになる。ブッダになろうと決意してから、宇宙が発生から消滅に至る過程を途方もなく繰り返す間、ゼロが51付く回数の三倍も繰り返す間、せっせと準備を続ければ、めでたく目的を達することができる。インドでは同じ心が次々と移転して、いつまでも機能し続けるので、時間切れの心配は全くない。

205) 小林,「謡曲に見られる草や木のジャウブツ 借用語に託された日本人の心情」, 『桃山学院大学人間科学』26, 2003, 19-43。

日本では草や木もジャウブツ(成佛)するが、仏教では動物さえ今の姿でブッダになることはありえない。動物の身体に宿っている限り、ブッダになる準備をするのが極めて困難である。動物の身体に宿る心は、ほぼ無限に「心の移転」を繰り返して、先ずいつの日にか人間の身体に移らなければならない。植物については論外である。

仏教の体系では、「行い」が三つの局面でとらえられる。『首楞嚴三昧經』で“身の業、口に随ひ、口の業、意に随ふ”と言われるように(『大正』15, 635), 体を動かす行動は声出す意志表明を前提とし、声を出す意志表明は心でなされる思考を前提

桃山学院大学人間科学 No. 34

とする。この立場に立つと、体を動かすことは心で判断することを抜きにして考えられていない。自ら動く動物には必ず心が宿り、自ら動かない植物には決して心が宿らない。心がなければ、「心の移転」は起こらず、それから離脱してブツになることもありえない。

206) 古代の日本文化を専攻する研究者にとって、仏教は6世紀に伝わって日本に深く根付き、日本文化の形成に大きな役割を果たした。仏教が目指したものと同じものを日本人も目指すということになり、インドで“ブツ”と言われる語と日本で“ブツ”と言われる語は同じものを指すことになる。

日本で“ブツ” = “ブツ” という等式は不可侵の公理であり、自明の真理であるので、これを検討の対象にすることはない。もっとも、説明を何も受けずに信じ込まされているので、この点で意識はいつも朦朧としている。等式 “ブツ” = “ブツ” について、日本人の頭に付けられた思考の道筋はぼんやりしているが、それを敢えて言葉にすれば次のようになる。

1) インド文字で表記された“buddha”を漢字で表記したのが“佛(陀)”である。同じ語を違う文字で表記したに過ぎないから、“ブツ”と“佛”は等価である(“ブツ” = “佛”)。

2) 同じ漢字である以上、中国文献で使われる“佛”と日本文献で使われる“佛”は等価である(“佛” = “ブツ”)。

3) したがって、サンスクリットの“ブツ”と日本語の“ブツ”は等価である(“ブツ” = “ブツ”)。

207) インド文化を知ろうともしないまま、知る必要を感じないまま、等式 “ブツ” = “ブツ” を信じている。そうすると、自分たちが日本で知っているものがインドにもあったと思っていることになる。日本人と考え方や生き方を共有する人々がマレー半島の向こうにいたということになる。このような独り合点の思いは、これは今に始まったことではない。

『今昔物語集』の伝える話によると、テンチク(天竺)では春に桜が美しく、秋に紅葉が山に映える。そして、テンチクの人々は栗と柿が好きで鮑と鰹を好む。ブツになる気はまるでなく、ひたすらマコトノココロ(誠心)の実現に励む(小林, 「インド起源の話に描かれる日本の風景と文化」, 『桃山学院大学国際文化論集』28, 2003, 39-76)。

平安時代の日本人が抱く集団幻想の中で、インドでは人が死ぬとみなブツになり、草や木どころか石や瓦もジャウブツ(成佛)する。世のムジャウ(無常)が貴ばれて、ムガ(無我)の境地が求められる。そして、サハリ(障)のせいで女は蔑まれる。何しろ日本の“ブツ”はインドの“ブツ”と同じなのであるから、日本にある

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

ブッキョウとそっくりのものがインドにもあったことになる。

その頃と違って今では、インド文化について知ろうと思えば情報源がいくらでもあるが、日本人は頑なに目を背けている。日本のブッキョウが「世界宗教」であるという幻想が壊れるのをひたすら恐れ、現実にも目を向けようとしないのである。日本人の行う日本文化研究は、重要な局面でいまだ神話と伝承をなぞるに留まり、御一新後140年経っても近代化の兆しが無い。

208) 小林,「最澄が描いた日本文化 森羅万象に認められるブツの資格」,『桃山学院大学人間科学』29, 2005, 37-55。

小林,「日本オーソドクシー点描」, 75-101。

小林,「田辺繁子のインド古代法理解 古い幻想の上に重ねられた新しい幻想」,『桃山法学』7, 2006, 313-336。

小林,「サハリのせいで救われない日本の女」, 199-215。

209) 異端派の仏教であれ、正統派のシヴァ教とヴィシュヌ教であれ、このことは広くインドで信じられている。ヴィシュヌ教の基本文献プラーナ (purāṇa) では、膻 (yoni) を通過する際に記憶が失われる次第が記述されている (*Mārkaṇḍheya-purāṇa*, ed. K. M. Banerji, Calcutta, 1962, 83)。

こういうことが起こらない異常人物も稀にいる。仏教を始めたシャーキャ・ブッダは、母親の脇 (pārsva) から生まれたので、膻を通る激痛を経験せず、前世の記憶を失わずに済んだ。そうすると、哺乳類以外の動物なら前世のことを覚えているのか。プラーナ文献を片っ端から探してみたが、この問題を取り上げた記述は見つからなかった。インド人が「心の移転」を考える際に、魚や虫は念頭にないらしい。

210) 小林,「死を越えて追いかける借金取り 日本の説話に使われた中国のモチーフ」,『桃山学院大学人間科学』23, 2002, 35-75。

211) 『太平記』16, 後藤丹治/釜田喜三郎(校注),『古大』35, 159。

楠兄弟にしても、生まれ変わって後醍醐の子孫に協力するつもりであろうが、7という数を挙げるだけで、来世の一回一回について具体的な計画があるわけではない。「複数回の生まれ変わり」について日本に伝承があるわけではないのである。

212) 周天遊,『袁宏後漢紀校注』10, 天津, 1987, 276。

213) *ibid.*, 277。

214) 塚本善隆,『魏書釋老志の研究』, 1961, 103。

215) 『續日本紀』4, 33。

216) 『日本書紀』25,〔後編〕249-251。

中国では皇帝が「天」の命を受けて国民を統治する。皇帝が善政をしいて統治に成功すると、これを評価して「天」は地上に「祥瑞」を出現させる。麒麟や鳳凰な

桃山学院大学人間科学 No. 34

ど珍しくめでたい動物が現れるのはそういう時である。日本に白雉元年（650年）二月九日に現れた白いキジも、中国流に考えれば「祥瑞」であるが、天皇は「天」の命を受けて統治しているわけではないので、日本でズイホウを出現させるのはカミである。

217) 『續日本紀』17, 202。

218) 小林, 「過ちを悔いずに行う悔過」, 112-117。

219) ヒンドウイズムの神 (deva) は仏教に採り入れられて、ブツダの協力者となったが、自分自身はブツダになる準備を進めていないし、ブツダを目指すようにと他人を督促することはない。したがって、仏教で神々はブツダ候補生 (bodhisattva/菩薩) でさえなく、崇敬の対象ではありえない。

仏教で伝えられる伝承によれば、神々の住む天国 (svarga/天界) は、地上世界と同じように「欲望のある世界」(kāmadhātu/欲界) に属する。仏教の伝承では神々もいつかは死ぬ。死ぬと心は次の体に移って、生きる苦しみを味わい続ける。

ラクシュミーは幸運の提供すなわち物資の提供によって、「四人の大王」は軍事力の提供によって、それぞれの持ち味を生かして、ブツダの活動に協力する。すなわち、人々にブツダを目指すさせようとするブツダを助けて、準備がしやすい状況が整うのに力を貸す。しかしながら、人間や動物と同じように「欲望のある世界」に住む以上、崇められて礼拝を受けることはない。中国人の立場に立てば「罪」を「懺悔」する相手ではありえないのである。

220) 道宣の『廣弘明集』には、「吉祥天」の彫像の前で読まれた「懺文」が見られない。陳の文帝に読んだ「懺文」の中に「金光明懺文」(『廣弘明集』, 222b.c) があるが、「吉祥天」への言及は見られない。

221) 『續日本紀』28, 339。

222) ラクシュミーは美と幸運の女神であるが、『スヴァルナーソッタマ・スートラ』の第8小作品では、もっぱら幸運の女神の面に焦点が当てられている。というよりも、ここに登場するラクシュミーは物資の女神であり、金銀や宝石から穀物に至るまであらゆる形の富を支配する女神である。

このラクシュミーはヴィシュヌ教の最高神ヴィシュヌの妻として崇敬を集め、おびただしい数の彫像と絵画が作られて、美と幸運の女神としてインド中の人々が家庭で熱心に礼拝している。蓮を手にしたラクシュミーは海の中から発生した。神々と悪魔たちが争って海が攪乱された時のことである。今も蓮を手にしたラクシュミーは、蓮の上に座っていて、側にいる二匹の象が鼻でかける水を浴びている。

223) 義浄, 『金光明最勝王經』, 16 大吉祥天女品, 『大正』16, 439a:〔我(吉祥天),〕能く無量百千萬億衆生をして諸快樂を受けしめ, 乃至, 須むる所の衣服・飲食・資生の

日本で開発されたヤクシ・ケク（薬師悔過）

具，金銀・瑠璃・車蕙・瑪瑙・珊瑚・琥珀・眞珠等の寶，悉く充足せしむ。

224) *ibid.*, *loc. cit.*: 毎日，三時中に我が名を稱念して，別に香花及び諸美食を以て我を供養し，亦，常に此の妙經王を受聽せば，是の如き福を得む。而して頌を説きて曰く。能く地味をして常に増長せしめ，諸天をして雨を降らしめ，時節に隨はしめ，諸天衆をして咸な歡悦せしめ，及び園林穀果神を以て叢林果樹並に滋榮せしめ，所有の苗稼，咸な成就せしむ。

225) 『スヴァルナーバーソッタマ・スートラ』のヴァージョンの中で，曇無讖の『金光明經』は，最も古い状態を伝えているはずなのに，「四天王の軍事援助」を取り上げている箇所は，テキスト発展史上で後の段階を反映するサンスクリット本よりも繰り返しが多く，意図的な増幅が示唆されるが，テキストの分析して比較する作業がされていないので，詳しい事情は分からない。

226) 曇無讖，『金光明經』6「四天王品」，『大正』16，340.344。

227) 玄奘，『藥師琉璃光如來本願經』，『大正』14，407c: 此の善根及び彼の如來の本願の力に由るが故に，其の國界を即ちに安隱を得さしめ，風雨時に順はしめ，穀稼成熟せしむ。

228) 『日本靈異記』の伝える話から示唆されるように，キチジャウテンが財産を与える超越者であることは，8世紀の日本でよく知られていたようである。パーティーを開くための金がなかったので，女はキチジャウテンの像に泣きついた。すると，小さい頃の乳母がやって来て，御馳走をいっぱい届けた。喜んだ女はお礼に服とスカートを乳母に着けさせた。後になって再び拝みに行ってみると，キチジャウテンの像は，あの服とスカートを着けていた。乳母の家へ行って聞いてみると，何も知らないと言う。すべてはキチジャウテンの取り計らったことであつた。（『日本靈異記』中14，141.143）

229) 8世紀の日本で権威があつた『金光明經』の第8小作品では，確かにキチジャウテンは気前のよい物資供給者である。このことは全文献の中ではほんのエピソードに過ぎないが，日本人はこれにすっかり夢中になつた。そして，キチジャウテンに関して，インドにも中国にもない伝承が日本で発生している。その夫がビシャモンテン（毘沙門天）であるという話である（『三寶繪詞』下2御齋會：吉祥天は毘沙門天の妻なり）。

“ヴァーイシュラヴァナ”（*vaiśravaṇa*）は，富の神クベラ（*kubera*）の別名である。ラクシュミーの夫をクベラとするのは日本人だけである。人間に限りなく物資を供給するキチジャウテンは富を管轄するビシャモンテンの妻としてふさわしいと思つたのであろうか。なお，クベラは「四人の大王」の一人として北方の防衛を担当するが，そこまでは日本人も関心を向けなかつたようである。

桃山学院大学人間科学 No. 34

230) シテンワウ（四天王）が登場する小作品で語られる軍事援助にキチジャウテンが登場する小作品で語られる物資援助を加えれば、国家の安全は保障されて国民の生活は平穏になるが、この二つはそれぞれ独立した小作品であり、間に別の小作品を挟んで、互いに繋がりは全くない。それに、国家運営に役立つことがたまたま出ているのは、この二つの小作品だけである。『金光明經』は全体として「鎮護國家」の保証を統一テーマとしているわけではないのである。

それに、たまたま二つの小作品でそれぞれ取り上げられる物資援助と軍事援助は、大乘經典の『金光明經』にしてみれば、それ自体が目的ではない。地上の国王に軍事援助をして平和をもたらし、国民に物資援助をして暮らしを楽にしてやれば、ブツダを目指して準備をする上で有利な条件が整う。これこそ全ての大乘經典が追求する究極課題である。

231) 源為憲、『三寶繪詞』下2 御齋會、江口孝夫（校注）、1982、17: 七日夜をかぎりて、ひるは最勝王經を講じ、夜は吉祥梅過をおこなはしめたまふ。吉祥天は毘沙門の妻なり。

7世紀に始まる日本人の「四人の大王」観を知る上で、この文献の説明は興味深い。『金光明經』の第6小作品にしか登場しないのに、この説明では「四人の大王」が『金光明經』全体の主人公となっている。そして、軍事を担当するブツダの由来に過ぎないのに、独立した救済者となっている。

232) 『續日本後紀』の記述によると、モノノケとヒノケが宮中に現れて、ヤクシケクウによって鎮められたという（『續日本後紀』13、『國大』3、156）。「モノノケ」という語も「ヒノケ」という語も、語義が十分に理解されていない。なお、平安時代の物語にモノノケはよく現れるが、ヒノケが登場することはない。

『萬葉集』3886に「日乃異干」（日の異に干し）とあるが（『萬葉集』3886、『古大』4、166）、多くの注釈や辞書で「ヒノケ」という語は「日の氣」（日光）と解されている。しかしながら、「ヒノケ」の“ケ”は甲類の仮名“異”で表記され、乙類の仮名“氣”で表記される“ケ”とは別の語である（沢瀧久孝、『萬葉集注釋』16、1964、254）。

『萬葉集』2166の“池の波ゆ鳥が音^ね異に鳴く”（『萬葉集』2166、『古大』3、116.）などから見ても、“モノノケ”と“ヒノケ”の“ケ”は、もともと「標準から著しく逸脱した状態」を表す抽象名詞であると考えられる。そして、『萬葉集』3886の“ヒノケニ”が表す意味は、「日照りが並外れている状態で」「非常に強い日差しのもとで」と考えると考えるべきであろう。

“モノノケ”と“ヒノケ”の“ケ”は、「はなはだしさ」を意味する抽象名詞“ケ”が普通名詞に転用されたものと考えられ、本来の意味は「標準からはなはだしく逸

日本で開発されたヤクシ・ケク(薬師悔過)

脱したもの」「並外れたもの」「異常なもの」であるということになる。このことを示唆するのは、『続日本後紀』に見られる漢字表記で“ヒノケ”の“ケ”に“異”を当てていることである。そして、このような「異常なもの」のうち、ヒ(日)という時間単位と何かの関わりがあるものが“ヒノケ”と呼ばれたのであろうか。

233)『続日本後紀』13,『國大』3,156。

9世紀前半の日本で恐れられた正体不明のタマには、モノノケの外にヒノケ(日異)があった。モノノケやヒノケをやっつけるために、清涼殿で『薬師經』を読ませて常寧殿で「薬師の法」を行わせ、大極殿で『大般若經』を「轉讀」させたのである(『続日本後紀』13,156)。

ヒノケはやがて姿を消し、再び文献に現れることはなかったが、モノノケはその後大活躍し、11世紀初頭に成立した『源氏物語』には、“モノノケ”という語が29回、“御モノノケ”という語が23回見られる。原因不明の病気や精神異常はすべてモノノケのせいとされ、死をもたらず重症はいうまでもなく、嘔吐(『源氏物語』,葵,『古大』14,338)やノイローゼ状態(ibid., 柏木,『古大』17,14)などの軽い症状も、モノノケに取り付かれた結果であるとされている。

なお、中国語文献で“轉讀”という語は「節をつけて仏教文献のテキストを朗読すること」を意味する。“轉”という語の意味は「ぐるぐる回る」「次々に変わる」であり、合成語“轉・讀”は「声の高さや長さを次々に変えて読む」の意味で用いられるのである。ところが日本文献では、「[大きな經典を]飛ばし読みすること」を指し(「次々に場所を変えて読む」)、「經典全体の朗読に代えて、最初の部分と中ほどの部分と最後の部分だけを朗読する」という意味で用いられる。それぞれの部分を少しずつ読んで、全巻を通読したことにするのである。読む字数は極度に少なく、時間と労力の点では確かに手抜きかも知れないが、このような読み方をしても、何しろ巨大な經典のことであるから、宿る超自然力は見事に発揮されるらしい。

234)『続日本後紀』6,67:[承和四年六月]壬子。勅す。聞く如く、疫癘、間發し、疾苦する者、衆し。夫れ、殃を未然に鎖すは、般若の力に如かず。宜しく五畿内七道諸國內の行者廿口已下十口已上をして、國分僧寺に於て、七月八日より始めて三箇日、晝は金剛般若を讀ましめ、夜は薬師悔過を修せしめて、事竟るまで殺生を禁斷すべし。

ibid., 9, 105:[承和七年六月]丁巳 …… 加へ以て季夏に雨らず。嘉苗燠に擬る。夫れ、殃を鎖し祐を受くるに、必ず般若の力を資ふ。國を護り民を安じる事、修善の功に由る。宜しく五畿内に命じて、七ヶ日間、晝は金剛般若經を轉じせしめ、夜は薬師悔過を修せしむべし。長官精進すべし。必ず靈感致らむ。修善の間、殺生を禁斷すべし。

桃山学院大学人間科学 No. 34

ibid., 11, 130:〔承和九年三月〕庚戌。又勅す。若し未然に攘はざらば、恐らく班時に時を失せむ。宜しく五畿内七道諸國に仰せて、修行不退の者二十人を簡^{えら}び、國分寺に於て、三箇日間、晝は金剛般若を讀ましめ、夜は藥師悔過を修せしめて、修善^{こゝろ}の比、殺生を禁止すべし。

承和4年(837)の「勅」で“殃を未然に鎖すは、般若の力に如かず”と言われ、承和7年(840)の「勅」で“殃を鎖し祐を受くるに、必ず般若の力を資る”と言われているように、災害を予防するのに最も効果があるのは『般若經』に宿る呪力であると信じられていたのである。このように『般若經』の朗誦が「藥師悔過」とセットになる場合は、「飛ばし読み」(轉讀)をするにも480万字の『大般若經』では大きすぎたのか、6000字足らずの『金剛般若經』が代用されている。

235) ibid., 13, 156.

236) 般若經典群は“〔すべての物は実体を欠き、世界は〕からっぽである”(sūnyatā/空)と主張する。この種の文献を何種類か中国へ持ち帰った玄奘は、それを一括して訳して通し、全体を『大般若(波羅密多)經』(『大正』5.7)と呼んだ。この文献の第1部は79章から成り、その第40章が「魔事品」(『大正』6, 541.552)である。

237) 中国文献『觀佛三昧海經』によると、『般若經』には「般若呪力」が内在するという。もっとも、この超自然力は「佛道」の実現のために用いられるのであり、人間生活に都合のよい奇跡を起こすために用いられるのではない(『觀佛三昧海經』1, 『大正』15, 647b)。

そして、『仁王護國般若波羅蜜經』によると、『般若經』には天変地異を阻止する超自然力が『般若經』に内在するという(『仁王般若波羅蜜經』, 『大正』8, 830a)。國が混乱すると「鬼神」が落ち着きを失って凶暴になり、そのせいで天変地異が起こり、災害が頻発する。『般若經』を聞かせて「鬼神」を落ち着かせれば、混乱の増幅を遮断できることになる。

この文献では、続いて凶暴なカルマーシャパーダ(kalmāṣapāda/斑足)の話が紹介される。「般若波羅蜜の偈」を聞くや、カルマーシャパーダは凶暴さが消え、殺すつもりでいた人々を解放する(loc. cit., a-c)。「般若波羅蜜」を説く言葉を聞くと、「鬼神」が落ち着きを取り戻して凶暴な活動を止めるので、社会混乱が静まり災害も収まる。

238) 中国人が『般若經』で対処すべき相手は、カルマーシャパーダのように、凶暴ではあるが、正体が分かっている、『般若經』で説かれている真理に心を動かされる。ところが、日本人が対処すべき相手はワザハヒを起こす正体不明のモノノケ(物の怪)であり、真理に心動かされるような相手ではなく、『般若經』に内在する呪力を利用してやつつけるしかない。

日本で開発されたヤクシ・ケクウ（薬師悔過）

8世紀前半以来、日本では『大般若經』に強力な呪力が内在すると信じられていて、「8日間にわたって、昼は『般若經』を唱え、夜は薬師悔過を行う」という基本パターンが定まった。秋の凶作を防ぐために、そして大勢の人が死ぬのを防ぐために、政府は積極的にこの複合呪術を行った。そして宮中の人々は、ふとどきなタマが引き起こすワザハヒを未然に防ぐために、この複合呪術をしばしば行った。

239) 『日本後紀』21, 『國大』3, 40。

240) ハラヘが行われる際に、ツミを贖うために差し出す物品。多くの台に乗せるので、「チクラ・ノ・オキト」（千座の置戸）と呼ばれる。最初のハラヘはスサノヲ（素戔鳴）に対して行われた。スサノヲが傍若無人に振る舞って、数々の悪事を働いたので、カミガミが相談して処置を決めた。スサノヲにチクラ・ノ・オキトを科料として差し出させ、髭を切り手足の爪を抜いて、タカマガハラから追放したのである（『日本書紀』1, [前篇] 37）。

語合成「チクラ・ノ・オキト」の第1要素「チクラ」の「チ」は「千」「多数」を指し、「クラ」は「何かを置く場所」「置き場所」を指す（cf. 「クラ」（鞍）, 「クラ」（倉））。したがって、「チ・クラ」は「多くの置き場所」を意味する。青木紀元によると、「コト・ト」（事戸）と「ノリ・ト」（詔戸）の「ト」は「呪言」を指し、「トゴヒ・ド」（詛戸）の「ド」は「呪物」を指す（『祝詞古伝承の研究』, 東京, 1985, 154）。そうすると、「とノド」は「呪力を備えたもの」と考えられ、「オキ・ト」は「置くべき呪物」を意味することになる。語合成「チクラ・ノ・オキト」が指すのは、「多くの置き場所に置くべき呪物」である。ツミを犯した者には、これを科料として差し出させる。

241) ワザハヒ対処策を未来に拡大することによって、日本人は新しい問題を抱えることになった。ワザハヒを前もって予見することである（小林, 「シルシによって予知されるワザハヒ 日本人が輪廻轉生を受け入れなかった背景」, 『桃山学院大学総合研究所紀要』26. 1, 2000, 235-246）。日本人にとって、ワザハヒの先触れは自然現象の中であった。『日本靈異記』ではこれを「シルシ」（表）と言い、『源氏物語』では「モノノ・サトシ」と言う。

242) 日本語で「ヒジリ」という語が指すのは、超人的能力を操る特殊技術者であって、高い境地に到達した理想の人格ではない。『萬葉集』の2巻29には「^{かしはらのひじりのみ}檀原乃日知之御世從 ……」とあって、合成語「ヒ・ジリ」が「日知」と表記されている。その前分が「日」を指す「ヒ」であるとすれば、「ヒ・ジリ」という語は、「[何かが起こる]日を[前もって]知る者」「予知する能力を備えた者」ということになる。

この語の語源を「ヒ」（火）+ 「シリ」（知ること）とするのが通説であり、五来重は（火）+ 「シリ」（管理すること）とする（『高野聖』, 増補版, 東京, 1975, 29-30）。しかしながら、「ヒ」（日）は甲類であるのに対して、「ヒ」（火）は乙類であって、こ

桃山学院大学人間科学 No. 34

の二つは別の語である。『萬葉集』2巻29を見る限り、合成語“ヒ・ジリ”の前分を“ヒ”(火)とする語源説は成り立たない

243)『類從三代格』2,『國大』25,〔前編〕67: 去年の冬に雷あり。恐らくは疫と水有らむ。宜しく空海法師をして東大寺に於て國家の爲に灌頂道場を建設せしめ、夏中及び三長齋月に息災増利の法を修せしめ、以て國家を鎮めしむべし。

「冬の雷」という異常な自然現象は、流行病と洪水のシルシであった。空海に委託された任務は、このようなシルシを認知してワザハヒが起こる前に手を打つことであった。この点で有効な先端技術として、政府が空海に期待したのは異常現象を予知することであり、それに何かの手を打つことであった。

244) 象徴操作によってブツダになる方法を“タントラ仏教”と言い、中国語で“密教”と訳された。しかしながら、空海自身がこの方法でブツダになろうとしたことはないし、弟子たちが書き残したのものにも、そのことへの言及は見られない(cf. 小林, 「アーヴェーシャと阿尾奢,そしてアビシャ/バク “仏教東漸”と言われていることの実態」,『桃山学院大学国際文化論集』31,2004,3.21)。

245) 8世紀の日本で政府はワザハヒの予防にそれほど強い関心がなかったが、822年の太政官符では、去年の冬に雷があったことを根拠に、流行病と洪水を予見し、前もってそれに対処させようとしている。ワザハヒ対処策の範囲が拡大して、未来に起きることの予防に及ぶことになったのである。

246)『日本三代實録』7,『國大』4,112.113:〔貞觀五年五月〕廿日壬午。神泉苑に於て、御靈會を修す。……所謂御靈とは、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、及び觀察使、橘逸勢、文室宮田麻呂等、是れなり。……近代以來、疫病、繁發す。死亡、甚だ衆し。天下、以爲、「此の災ひ、御靈の生ずる所なり」と。

ゴリャウとゴリャウ・エに言及する最初の記事がこれである。大規模なワザハヒを防ぐために、第1回のゴリャウ・エが神泉苑で行われた。ここでゴリャウとして選ばれたのは、政治陰謀の犠牲になって無念の死を遂げた6人のタマであった。まず早良親王(?・875)がいて、これに伊予親王(?・807)とその母親が続く。次に“觀察使”と言われているのは藤原仲成(774.810)のことであり、これに橘逸勢(?・842)と文室宮田麻呂(『續日本後紀』163.164)が追加される。